

ロダンのバルザック

―右側プロフィールに隠されたファロスの表象

人が嘲笑い、破壊できないためしつこく笑いものにした、この作品は、私の全人生の成果であり、私の美学の軸そのものである。(ロダン、ル・マタン紙一九〇八年七月十三日号)

松岡茂雄

目次

はじめに

はじめに (89)

《バルザックモニュメント》一八九八年サロンへの出展と撤収 (91)

一八九八年当時の世間の認識 (91)

二〇世紀初頭、ロダン自身によるキャンペーン (93)

二〇世紀後半、ファロスとしての認識 (96)

ロダンのバルザック、制作過程 (99)

ファロスの表象にいたる、エチュードの形態変化 (101)

最後の最後まで右側プロフィールにこだわったロダン (105)

結論 (108)

フランス語レジメ (114)

東京上野の国立西洋美術館には、ロダンの傑作《カレーの市民》、

《地獄の門》およびそれから派生した《考える人》が屋外展示されている。しかし、サーの称号を持つ、英国の著名な美術評論家ケネス・クラークが、数あるロダン作品の中で最高傑作と称えた《バルザックモニュメント》¹⁾はその中に含まれていない。ロダンのバルザックに関しては、わずかに完成作品から二段階さかのぼる小さなエチュードが、館内に展示されているのみである。²⁾

わが国でロダンのバルザックと称するものが見られるのは、他に静岡県立美術館がある。ここに展示されているのは、習作の一つ、頸のない《裸のエチュードF第2、闘技士》³⁾である。このエチュードは、後述のようにバルザックモニュメントの制作過程後期で重要な役割を果たしたもので、その性的ポテンシャルは観者に強い印

象を与える。

このほか鹿児島の長島美術館には、本館入り口に、両腕を組み、両脚を拡げて立つ《裸のバルザック、エチユードC》⁽⁴⁾が置かれている。この《エチユードC》は、一八九一年からスタートしたロダンのバルザック制作第一段階の帰結であり、後に独立作品として鑄造された完成度の高い作品である。

エチユードではなく、ロダンの《バルザックモニュメント》⁽⁵⁾それ自体をわが国で鑑賞するためには、箱根にある彫刻の森美術館を訪問せねばならない。⁽⁶⁾入場者はゲートを抜けると真正面の台座上に、威厳に満ちた、高さ3メートル弱のバルザック像を目にすることになる。入場者がその像の右側(向かって左側)に少し離れて立つと、その姿は一変し、《バルザックモニュメント》はファロス(屹立した男性自身)の様相を呈することに驚かされる。⁽⁶⁾このファロスの表象はロダンが意図的に実現したものであり、本論文はその表象がロダンの《バルザックモニュメント》創作過程の中でいかに形成されたかを考察するとともに、最終エチユードと《バルザックモニュメント》の比較研究から、作品の仕上げ段階における巨匠のファイナルタッチへの接近を試みるものである。なお、最終エチユードについては、パリ郊外ムードンのロダン美術館別館と、サシエ城のバルザック記念館で二〇〇四年六月に実物取材したが、ムードンの地下収蔵庫での写真撮影には、ロダン美術館チーフキュレーター、アントワネット・ル・ノルマン＝ロマン氏の助力を得たことを付記する。



図2 ファロスを表象する《ロダンのバルザック》右側プロフィール



図1 箱根彫刻の森美術館《ロダンのバルザック》

